

大谷石文化を伝えたい私たちの思い

どこまでも暗く、冷たい風が吹き上げる大穴。そこから市内全域に広がる「日常」の景観や文化。

大量の石に恵まれた宇都宮の人々は、長い時の流れの中で、石材として「掘り」出し、石に祈りや願いを「彫り」、建材・建造物からコースターのような小物に至るまで「使って」きました。

大谷石を掘って、彫って、使った、私たちの文化が日本遺産になりました。「日本遺産とは言うけれど、こっちからしたらずっとあるもんなんだ」という石工の言葉のとおり、私たちの日常こそが日本遺産であり、大谷石のある暮らしは今も続いています。

大谷石は、いろいろな人や物をつなげるツールであり、私たちの生活とともにあり、馴染んで、私たちを少しだけ豊かに変えてくれる宇都宮暮らしの象徴です。

私たちは、大谷石のある暮らしや文化の担い手として、前の世代から託された文化を次の世代に伝え、大谷石文化を継承し続けます。

そのため、文化を伝える案内役として、石を使った暮らし方や、石産業、石工職人の存在まで、大谷石文化の本質を伝えていきます。

指針1（価値を学ぶ）生きて地域に根付き、今もなお成長し続ける文化として、大谷石のある暮らしの価値を学び、自分たちの言葉で大切に伝えていきます。

指針2（自分たち事化）文化の担い手である私たち市民が、自らの暮らしの中に大谷石を見つけ、大谷石文化を「自分の事」から「自分たちの事」に広げていきます。

指針3（交流）相手の知りたいことを把握し、場所や物の説明に留まらず、自分自身の経験や体験、思い出を含めて大谷石文化の本質を伝え、交流します。

指針4（継承）これまでの石の使い方に始まり、石文化の新しい価値を多面的に考え広げて、大谷石文化を未来につなげていきます。